

善意と文学 —— 語りの「丁寧」をめぐって

第15回

アリスと「イライラ」

——ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』(上)

阿部公彦

Abe Masahiko

引き続き、丁寧に伴う「イライラ問題」について考えてみたい。礼節の現場では、なぜか人は不機嫌になりがちである。といっても激しく憤るわけではない。深い感情の動きより、神経が先に立つ。ピリピリ、イライラする。

今回とりあげるのはルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』である。英国の礼節が曲がり角を迎えたと言われる18世紀末、作法書の大きな関心となっていたのは、若い女性がいかにして適切な形で結婚相手を見つけるかという問題だったが、当然ながら書物を通した教化の対象は女性に限られたわけではなかった。もっと低年齢層を念頭に置いたものも多く出回った。これらに特徴的だったのは、子供を対象とした語りに、さりげなく「教化」という要素が盛り込まれたということである。

18世紀から19世紀にかけ作法書に懐疑的な視線が向けられる中で、そうした児童書のあり方に対してもさまざまな批判が

出てきた。児童の教化にしばしば用いられたのは、教会で伝統的に使われてきたQ&A方式の教理問答のスタイルだったが、ウィリアム・ブレイクやウィリアム・ワーズワスといった詩人はまさにこの教理問答方式を転覆するような詩を書くことで、当時の教育方法に異議申し立てを行っている。¹ さらに時代が下って1865年に出版された『不思議の国のアリス』は、そうした一連の流れのよりラディカルな結実とみなせるものである。すでに指摘されてきたように、アイザック・ワットの『聖歌集』やアン・テイラーの『花々の中での結婚』など、18世紀から19世紀に出回った児童向けの出版物のパロディが、この本では頻りに顔を出すのである。

しかし、果たして『不思議の国のアリス』は指南書的なものから自由だったのだろうか。当時の教訓主義に対するアンチテーゼを含んでいたのは間違いないとしても、『不思議の国のアリス』もまた、童話という枠組みに乗ることで成立した読み物である。実際、この本に描かれた場面を見ていくと、童話ならではの礼節への配慮が見て取れる。他者への愛と心遣いを前提とするような振る舞いのコードに、登場者たちは明らかに敏感なのである。しかし、だからこそかもしれないが、丁寧につきものの「イライラ」もまた、あちこちで目につく。この「イライラ」がいったい何を意味するのかを考えてみたい。

〈イライラ〉が共有される世界

不思議の国に迷いこんだアリスはさまざまな出会いを経験する。アリスの冒険は基本的に、見知らぬ人との「遭遇」や「対

¹ このあたりの問題についてはA・リチャードソン参照。

面」として演出されるのである。それはちょうど社交界デビューを果たした若者の置かれた状況と似ているかもしれない。ただ、これらの出会いには際だった特徴がある。最初にアリスが会話らしきものを持つ相手はネズミなのだが、このときからすでに、アリスの会話相手はぷりぷりと怒っているのである。その原因が自分にあることにアリスもすぐに気づく。

「あら、ごめんなさい」アリスは慌てて声をあげた。哀れなネズミの機嫌を損ねてしまったかもしれない。「うっかりしてた。あなたは猫を好きじゃないのよね」
「猫を好きじゃないだって！」ネズミは感情的になって金切り声をあげた。「キミがボクだったら、猫を好きになるかい？」(42)

アリスは自分の飼い猫ダイナのことを思うあまり、猫を天敵とするネズミを怒らせてしまった。これ自体はたいへんわかりやすい話だ。しかし、このような「うっかり」が一度きりの出来事では終わらない。ネズミとお近づきになろうと気を遣えば遣うほど、アリスは余計なことを言ってネズミをいらいらさせてしまう。

「ねえ、何があったか教えてくれるって言ったでしょ」、アリスは言った。それから、「ほら、どうして『ネ○』と『イ○』が嫌いになったかってこと」と、また怒らせるんじゃないかとひやひやしなながら、アリスはささやき声で付け加えた。「まあ、長い、悲しい話なのさ」ネズミはアリスの方を向いてため息をつきながら言った。
「ほんと、長い尻尾をお持ちね」(50)

「話」と「尻尾」を混同したアリスは、せっかくネズミがしみじみと昔話をはじめたのに、そのストーリーの全体が「長い長い尻尾だわあ」と思うばかり、頭の中は「話」ではなく「尻尾」のイメージで一杯になっている。すると、ネズミはアリスの上の空の様子に気づく。

「こら、話を聞いているのか！」ネズミがアリスを叱った。「いったい何のことを考えてるんだ？」
「え？ 何ですって？」アリスは丁重に言った。「五つめの尻尾の折れ目まで来たところよ？」
「そんなところになんか来ちゃいないぞ」ネズミはすっかり怒って、きつい口調になった。
「え、尻尾がもつれたの？」何とかしてあげましょうか、とばかりにアリスは言い、あたりを見回した。「ほどくのを手伝って差し上げるわ」
「服なんか脱ぐものか」ネズミはそう言うと、立ち上がって行ってしまおうとする。「失礼な奴だな、わけのわからないことばかり言って！」
「ちがうのよ！」アリスは取りすがった。「でも、ずいぶん怒りっぽいのね」(52)

ネズミとのやり取りはこうしてすれ違いの連続となる。そこにはアリスの立場が典型的に表れているとも言える。不思議の国への闖入者としてのアリスは、見知らぬ住人たちとの付き合い方がわからない。だから、いちいち「うっかり」をしでかし、いちいち相手のイライラを引き起こすのである。アリスは空気を読めず共同体のルールを守らない無礼者として、反則を繰り返すべく運命づけられているかのようだ。

しかし、あらためて考えてみると、不思議の国はアリスにとってまったくの未知の世界とも思えないのである。また、その住人もまったく見知らぬ者ばかりでもなさそうだ。というのも、誤解につぐ誤解、不思議さに続く不思議さではあるのだが、少なくともアリスは、この世界の住人たちのイライラピリピリした様子だけは敏感に感じ取っているからである。「失礼だな」「ずいぶん怒りっぽいのね」といったやり取りにはどこかテンポのよいなめらかさもあって、むしろ、ここに至って両者の歯車がしっかりかみ合っているかと思えるほどである。

こう考えてもいいかもしれない。アリスは「イライラ」の感知を介してこそ、不思議の国に自分の居場所を見いだしているのではないかと。身体が大きさがどんどん変わり、アイデンティティの不確かさを抱えたまま夢のような世界をさまようアリスだが、自分に対してピリピリしたり、文句を言ってきたりするさまざまな住人たち——動物から虫からトランプのカードに至るまで——の、その「イライラ」の勢いのようなものにはしっかりと反応している。そしてアリス自身も、ときにイライラしたり、自分で自分に文句を言ったりもする。

いわゆる正統派の童話の教訓主義は徹底的にパロディ化しつつも、『不思議の国のアリス』のより深い部分には、作法書とのつながりが見て取れる。この作品では決して教訓が押しつけられることはない。きてれつな出来事や論理のねじれを通して見えるのは、日常のルールがまったく通用しない奇妙な世界である。しかし、そのような世界にあっても——いや、そのような世界だからこそ——より強く印象づけられるのは、共同体というものが何らかのルールに従って営まれようとしている、そして、そのルールをめぐるさまざまな騒ぎが起きうるとい

ことである。不思議の国の住人たちがかくもイライラし通するのは、そのようなルールへの依存が、一種の「ルールの暴走」とでも呼ぶべき事態を引き起こしていることを示すのである。ルールがないのではない。それどころか、ルールが過剰なのではないか。この物語に「イライラ」が蔓延するのは、そのためかもしれないのである。

〈文 献〉

*『不思議の国のアリス』のテキストは、Lewis Carroll. *The Annotated Alice: Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass*. Ed. by Martin Gardner (Harmondsworth: Penguin, 1970/1965)を用いた。その他の文献は以下のとおり。

Eliot, T.S. *Inventions of the March Hare: Poems 1909–1917*. Ed. by Christopher Ricks (New York: Harcourt and Brace, 1998)

Logan, Peter Melville. *Nerves and Narrative: A Cultural History of Hysteria in 19th-Century British Prose* (Berkeley: U. of California P., 1997)

Richardson, Alan. “The Politics of Childhood: Wordsworth, Blake, and Catechistic Method,” in *English Literary History*, 56 (1989), 853–68.

Woolf, Jenny. *The Mystery of Lewis Carroll: Understanding the Author of Alice's Adventures in Wonderland* (London: Haus, 2010)

高橋康也『ノンセンス大全』(晶文社 1977)

高山宏『アリス狩り』(新版)(青土社 2008)

(東京大学准教授)